

私の物語

をたどって

4

radotte@asahi.com

糸川昌成(57)の取材のきっかけは昨年5月、向谷地生良(62)との対談をきいたことだった。テーマは「こころの病を考える」。

糸川は分子生物学者で精神科医。母が統合失調症だったことを公表。向谷地は感銘をうけ、対談が実現した。

向谷地は、精神障害のある人たちの活動拠点「べてるの家」(北海道浦河町)理事。脳を研究してきた「ザ・科学者」の糸川は語った。

「30年脳を研究して(心の病は)分子生物学では解決し

ないとわかった。薬は脳には作用するけれど、魂を癒やさない。症状の文脈と意味が理解され、腑に落ちる物語を描けたとき、人は回復する」

向谷地が応じた。「とことん研究した人だからこそ、脳の薬だけではだめだ、ときちんと語れるんですね」

一方、糸川は2013年、べてるの理念「降りていく生き方」を知って胸を打たれた。科学者は世界一をめざす「昇っていく生き方」。50代

になりこのままの人生でいいのかと思ひ始めた頃だった。

回復って何だろう



「人生そのもの」と糸川がいう研究所の自室には、アインシュタインのポスターと縄文の土偶が同居する。毎朝4時すぎに出勤して裸足に。座禅も組む=2017年12月、中井征勝撮影

べてるが生み出した「当事者研究」は、統合失調症などの当事者が自らのことを研究するものだ。そして「私の物語」を描けたとき人として回復すると考える。「病気でなくても、私たちも一人一人、何らかの人生の回復の物語をもっている」と向谷地。まさに糸川もその一人だった。

私が昨夏、取材を申し込むと糸川は笑顔でうなずいた。「母は精神病院で、たった一人で亡くなりました。母の人生を知っていただくのは母の『供養』になりますから」

以来、糸川の「追っかけ」を続けてきた。この間、糸川が「思い出した」とつぶやいて語り始めたことがある。

糸川は16歳で東大精神科を

受診し、不安発作で電車に乗れない日もあったという。そして精神科医になったわけも――。最初は外科医にあこがれた。だが研修医の糸川は時折どうしようもない不安に襲われ、統合失調症の前ぶれではないかと恐れた。「精神科なら、発病しても対応できるのではないか」。抗不安薬は40代まで続けたという。

そのまま書いてもいいですか?と尋ねると、糸川は「いいですよ。新聞は事実を書くものでしょ」と即答した。

心の海に沈めていたことを話せるのは「僕が、思い出しでも大丈夫な状態になったから。母を思う胸の痛みは一生消えないけれど痛みの意味を理解できるようになった」。

あった。敬称略(生井久美子)

今が変わると、「過去」の記憶が変わる。「回復とは記憶のバージョンアップ、価値の転換」とも語った。自らを「偽物」という。「それを隠そうと必死に努力してきた。でも僕は僕。立派な話をしても、大酒飲むと記憶なくすしね」と苦笑する。

昨夏から糸川の講演を30回は聴いた。母の話はぐっと減り、関心は人類学、東洋医学、哲学、仏教へと広がる。母を語るのは母への供養だった。糸川も少し楽になった。「母の病は忌まわしいことではなく尊い人生だったと思えるようになったから。患者さんと接しても違わね」

語ることは自らのためでもあった。敬称略(生井久美子)

あった。敬称略(生井久美子)